令和元年度 フランス国立パリ聾学校（INJS）訪問交流の報告

久川　浩太郎・澤口　真弓・荒川　郁朗・福地　陽・石井　清一

筑波大学附属聴覚特別支援学校では、平成 15 年にフランス国立パリ聾学校と姉妹校協定を締結して以来、オンライン交流や相互訪問交流などで交流を重ねてきた。令和元年度は、高等部普通科生徒がオンライン交流を３回実施し、訪問交流を 12 月に実施した。本報告では、令和元年度にフランス国立パリ聾学校やパリ市内の文化施設等を訪問し、交流した様子と成果について報告する。

キー・ワード：国際交流　異文化体験　異文化理解　コミュニケーション　キャリア教育

1　はじめに

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、本校）は、海外の聾学校（フランス、韓国、台湾等）との交流を行う「国際教育推進事業」に取り組んでおり、相互訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者の受入れを通し、生徒の国際的資質を育て、これからの国際社会に通用するグローバル人材の育成を目指している。さらに、生徒が国際教育推進事業を経験することにより、将来、聴覚障害者の集団や地域社会や職場で広い視野に立ち、活躍していくことを目指している。

フランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、パリ聾学校）との交流は、平成 15 年の姉妹校協定の締結から始まり、相互訪問交流を平成 25 年度より行っている。平成 26 年度は、高等部生徒 10 名と教師４名が（鈴木, 2015）、平成 29 年度には高等部生徒 10 名と教師５名が渡仏し、パリ聾学校やパリ市内で生徒間交流を行い、異文化理解・交流を深めることで、国際的視野を広げることができた。また、オンライン交流も年に数回行っており、単発の交流にとどまらず、継続的に交流を行うことができている。令和元年度は、12 月８日から 13 日にかけ、高等部生徒９名と教師５名が、合計８回目を迎える相互訪問交を行った。本報告では、本校高等部普通科生徒がパリ聾学校やパリ市内の文化施設を訪問し、交流した様子や成果を報告する。

2　パリ訪問交流参加の抽選・事前学習

(1) 交流参加の抽選

パリ訪問交流の抽選会は、保護者も参観しやすいことから、９月 25 日の体育祭の昼休みに実施した（Fig. 1)。パリ訪問交流の対象者は本校高等部普通科１、２年生で、募集人数 10 名のところ、24 名の申し込みがあり、生徒のパリ訪問交流に対する興味関心の高さが伺えた。抽選実施後、参加者に対してパリ訪問の行程や今後の流れを説明し、準備の心構えや見通しをもてるようにした。

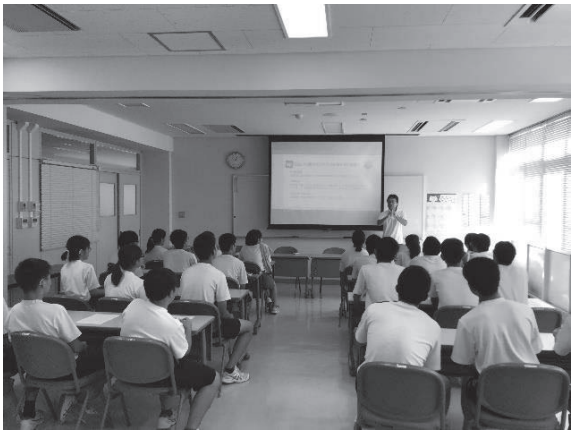

Fig. 1　パリ訪問者決定抽選会

(2) 事前学習

①　グループ別学習、文化祭での展示発表

フランスに対する生徒の興味関心が高い分野を確認するためにアンケートを実施し、「フランスの食文化」、「フランスの歴史」、「フランスの観光」、「パリ聾学校」の四つのテーマでグループ別学習を行った。

学習内容は文化祭において展示発表を行い、他の生徒や文化祭の来場者にも、国際交流の取り組みや事前学習の内容を発信することができた（Fig. 2）。

Fig. 2　文化祭の展示発表

②　フランス手話の練習

２週間に一回程度、朝のＨＲ前の時間を利用してフランス手話の練習を行った。内容は自己紹介や簡単な挨拶で、フランス手話の動画や指文字表などを利用した。また、外国ではサインネームがよく用いられることから､サインネームを考える活動を行い、自己紹介に取り入れた。

前回のパリ聾学校訪問の際は、自己紹介においても通訳を介していたが、練習したフランス手話やスライド資料を活用することで、今回の訪問時は通訳を介することなく自己紹介を行うことができた。

③　オンライン交流

11 月 22 日に、パリを訪問する生徒を中心に、今年度三回目となるオンライン交流を行った（Fig. 3）。

本校生徒は日本の伝統的な遊びや食べ物を紹介し、パリ聾学校からは寄宿舎などの学校施設の紹介を受けた。その後、英語による筆談や手話、身振りを用いながら自由に質疑応答を行った。事前にオンライン交流を行うことで、パリ聾学校の生徒とのコミュニケーションに慣れたり、訪問時に行うプレゼンテーションの工夫の参考になったりした。

Fig. 3　オンライン交流

3　パリ訪問の様子

(1) 訪問行程

パリ訪問の四日間の行程を示した（Table 1）。訪問行程は、生徒の希望を基に、パリ聾学校や旅行会社と検討して決定した。12 月５日から実施された年金改革に対するストライキの影響で、パリ聾学校は 12 月５日、６日は休校であり、９日も教職員や生徒がどの程度集まるのかわからないという状況であったが、概ね予定通りの活動を行うことができた。パリ聾学校の教職員や生徒は、地下鉄やバスが運休しているため、ほとんどが徒歩で出勤・登校したとのことで、欠席している生徒も多かった。

Table 1　パリ訪問四日間の主な行程

	実施内容
12/９ （月）	パリ聾学校訪問交流 ・自己紹介 ・プレゼンテーション ・昼食交流、スポーツ交流 ・職業科見学
12/10 （火）	パリ聾学校訪問交流 ・歓迎式典 ・ディスカッション ・昼食交流、スポーツ交流 ・施設見学、寄宿舎見学、交流
12/11 （水）	文化施設等観光 ・ルーヴル美術館、サント・シャペル ・クリスマスマーケット散策 OECD 職員からの講話

12/12 （木）	文化施設観光 ・エッフェル塔 ・アンヴァリッド（車窓から） ・ノートルダム大聖堂（車窓から） ・凱旋門

(2)　パリ聾学校訪問

①　本校のプレゼンテーション

パリ聾学校に到着後、校内のド・レペホールで本校生徒が１時間程度プレゼンテーションを行った（Fig. 4）。内容は、本校の紹介、日本文化紹介、昔話の劇（Fig. 5）、サインネームを取り入れたダンスの披露であった。スライド資料のデータを入れたタブレット端末を日本から持参し、プロジェクターで投影してプレゼンテーションを行った。説明の内容は英語や写真で作成し、英語、手話、身振りで説明した。

Fig. 4　日本文化のプレゼンテーション

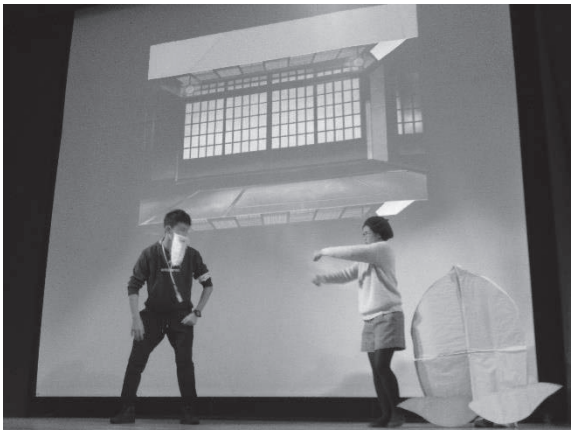

Fig. 5　昔話の劇

本校から、けん玉、箸、お手玉、両校の学校名を入れただるまを贈呈した（Fig. 6）。両校の発展と、今後の交流の継続を願い、両校の代表生徒がそれぞれだるまに目入れを行った（Fig. 7）。箸は壇上で体験してもらい、けん玉やお手玉は交流時に両校の生徒で利用できるようにし、その後の交流のきっかけになるようにした。

Fig. 6　贈呈したお土産

Fig. 7　だるまの目入れ

②　昼食交流・スポーツ交流

昼食時は教職員と生徒は分かれて、生徒のみで交流を行えるようにした。パリ聾学校の食堂でパリ聾学校の生徒が配膳指示をして、一緒に準備をした。昼食後は両校生徒でグループをつくり、バスケットボールやサッカーを行い交流した（Fig. 8）。昼食を取ったり、スポーツをしたりしながら、活発なコミュニケーションをとることができていた。教職員は他の部屋で昼食を取り、パリ聾学校の教師からフランスの文化について説明を受けたり、お互いの国の

教育制度や今後の交流について情報交換を行ったりすることができ、有意義な時間となった。

Fig. 8　体育館でのスポーツ交流

① ディスカッション

パリ訪問二日目の歓迎式典の後、三つのグループに分かれてディスカッションを行った（Fig. 9）。

Fig. 9　ディスカッション

ディスカッションのテーマは「ストライキについてどう考えるか」で、訪問時にパリで実施されていたストライキについて、パリ聾学校生徒と本校生徒で様々な意見交換をすることができた。意見交換は、筆談や手話や身振り、スマートフォンの翻訳機能など、様々な手段を用いて行われた。パリ聾学校の生徒からは、「今日は地下鉄もバスも運休しているため、両親は歩いて出勤している」、「ストライキの考え方は賛成だが、ストライキになると不便になる」など、実生活に即した意見を聞くことができ、日本の社会や自分たちの考えと比較することができた。ディスカッション終了後は、それぞれのグループから二名ずつ代表を選び、ディスカッションの内容や自分の考えを発表し、グループの意見を全員で共有することができた。

(3) 文化施設観光

① ルーヴル美術館観光

パリ訪問三日目の午前中はパリ聾学校の教師、生徒と共にルーヴル美術館を訪れ、様々な芸術作品を鑑賞した（Fig. 10）。パリ聾学校の美術担当教師からの解説があり、それぞれの美術作品について文化的、歴史的、宗教的背景から深く理解することができた。また、聴覚障害者が描いた絵画の説明もあり、展示されている芸術作品に対して、興味関心を高めることができた。

Fig. 10　ルーヴル美術館

② エッフェル塔観光

パリ訪問四日目の午前中は本校教職員、生徒のみでエッフェル塔を観光した。エッフェル塔の窓口には障害者割引について表示されており（Fig. 11）、持参した障害者手帳と身振りや筆談を用いて、生徒自身がスタッフとやり取りをして入場券を購入することができた。観光の時間が限られていたため、階段で昇り降りする際の所要時間や人数なども生徒自身でやり取りして確認することができた。パリ訪問初日と比べ、コミュニケーションへの不安がなくなり、パリ聾学校の生徒だけではなく、外国人の聴者に対しても積極的にコミュニケーションをとることができるようになった。

Fig. 11　エッフェル塔の料金表示

(4) OECD 代表部職員の講話

平成 31 年３月からパリ市内の OECD 代表部で勤務しており、学習到達度調査（PISA）に関する仕事を行っている日本人の方から 30 分程度講話をいただいた（Fig. 12）。講話の内容は、現在のパリの状況やその背景、パリでの生活や仕事内容についてであった。ストライキの状況の中、生徒たちがパリに訪問できたことについて、不便ではあるが大変貴重な経験になっており、この経験をきっかけにして様々な見方ができるようになってほしいとのことであった。また、普段仕事で感じていることや、学習到達度調査結果を基にして、生徒に身に付けてほしい資質能力を国際的な観点からお話を伺うことができ、生徒の国際的な視野を広めたり、キャリア教育につながったりすることができた。

Fig. 12　OECD 代表部職員の講話

4　事後アンケート調査結果

パリ訪問後、自由記述によるアンケート調査を行った。アンケート項目は、①事前学習の内容、②パリ聾学校との交流で印象に残っていること、③パリ聾学校との交流でやってよかったこと、④パリ聾学校との交流でうまくいかなかったこと、⑤文化施設観光や散策等で印象に残っていること、⑥全体を通して学んだことや今後取り組みたいこと、の６項目とした。

①事前学習の内容についての記述では、事前学習の回数は適切で、フランス手話やサインネームを扱ったことが良かったとの記述が多かった。また、海外訪問が初めてで、持ち物や地理についても入念に確認でき、パリを訪問した際に役立ったとの記述も多く、事前学習の内容は概ね適切であったと考えられる。一方、プレゼンテーションの練習をもっと行うべきであったとの記述も見られ、９月末から約２カ月という短い期間の中、工夫して事前学習の時間を確保する必要があることがわかった。

②パリ聾学校との交流で印象に残っていることについての記述では、パリ聾学校の生徒が積極的に話しかけてくれたことや、スポーツ交流を通してすぐに仲良くなれたとの記述が多かった。また、フランスと日本では手話は異なるが、一生懸命に伝え合えば通じることができたとの記述も多かった。これらのことから、国際交流において生徒同士の距離を縮めるには、言語を介さなくても楽しめるスポーツ交流が効果的であり、様々な交流の場を通して、両国の生徒が意欲的にコミュニケーションをとることができたと考えられる。

③パリ聾学校との交流でやってよかったことについての記述では、プレゼンテーションが練習通りできたことや、だるまや箸やお手玉など、一緒に体験できるものを贈り喜んでもらえたとの記述が多かった。また、昼食などの自由時間に、自由に交流できたのが良かったとの記述もあった。これらのことから、事前学習で準備したものや、生徒自身で考えて決定したお土産は適切であり、それを基にコミュニケーションを広めることができたと考えられる。

④パリ聾学校との交流でうまくいかなかったこ

とに関する記述では、プレゼンテーションが練習不足であった、パリ聾学校の生徒にもっと積極的に話しかければよかったとの記述がみられた。プレゼンテーションやコミュニケーションがうまくいったと答える生徒がいる一方、うまくいかなかったと感じている生徒もいることがわかり、事前学習や交流の場において生徒の実態に応じた指導・支援が重要だということが考えられる。

⑤文化施設観光や散策等で印象に残っていることに関する記述では、観光した文化施設に感動したという記述が多かった。また、フランスの文化や歴史に触れることができたことや、日本とパリの街並みや店員のサービスの違いなど、異文化について体験することができたとの記述も多かった。これらのことから、学校内の交流・見学だけではなく、文化施設等において生徒自らが考え行動することが異文化理解において重要であることがわかった。

⑥全体を通して学んだことや今後取り組みたいことについての記述では、コミュニケーションに関することや異文化理解に関することなど、多様な記述がみられ、様々な側面から国際的視野を広めることができたと考えられる。代表的な記述を挙げる。

・パリ訪問前は不安だったが、いざ行ってみると楽しくコミュニケーションをとることができた。
・相手の国の文化を尊重し、勇気さえあればどの国の人とも笑顔で話すことができると強く感じた。
・公衆トイレが有料であったり、公共交通機関がストライキで止まったりすることに驚いた。
・これからの生活において、相手の意見を受け入れ、尊重し、より有意義な議論ができるようにしたい。
・ストライキについては良いか悪いか分からないが、まず問題に向き合い考えることが大切だと感じた。
・５月にパリ聾学校の生徒が来校するので、パリを訪問した時よりも積極的に関わりたい。

5　まとめと今後の展望

パリ聾学校訪問交流や文化施設観光の様子、事後アンケート調査結果などから、自国の伝統や文化に誇りをもつとともに、他国の伝統や文化を尊重するなどの異文化理解が深まったと考えられる。また、パリ聾学校の生徒だけではなく、文化施設の職員などとも積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢が見られ、コミュニケーション能力が向上したと考えられる。さらに、パリ聾学校の生徒やOECD職員の講話などから、ストライキに対する考え方を聞いたり考えたりすることで、日本の政治のみならず世界情勢に対して目を向けられるようになった。

パリ訪問交流終了後、生徒が記述した感想を基に反省会を行い、パリ訪問交流を振り返るとともに、パリ聾学校に対して礼状を送付した。令和２年１月下旬には、高等部普通科内において事後報告会を行い、他の生徒にも体験したことや学んだ内容を伝える場を設けるとともに、フランス手話の学習やオンライン交流を引き続き行っていく予定である。

令和２年５月にはパリ聾学校から教師や生徒が来校する予定であり、今回パリへ訪問した生徒を中心に、学校全体でパリ聾学校との国際交流を継続していきたい。

6　国際交流と道徳教育の関連

平成31年に公示された特別支援学校高等部学習指導要領の道徳教育に関する配慮事項では、「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重すること、国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付けることに関する指導が適切に行われるよう配慮すること。」と示されており（文部科学省，2019）、国際交流が道徳教育と強く結びついていることがわかる。今後、パリ訪問交流が道徳教育にもたらした効果についても考察していきたい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を得ている。

〔参考文献〕

文部科学省（2019）特別支援学校高等部学習指導要領.

鈴木淳一（2015）フランス国立パリ聾学校との交流. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要,37,76-81.